

## 『やみ夜』の闇

——陰暦の五月廿八日——

浅野洋

### はじめに

明治二十六（一八九三）年七月、樋口奈津（夏）こと一葉は「糊口の文學の道をかへてうきよを十露盤そらばんの玉の汗に商ひといふ事はじめばや」（「につ記」明26・7・1）と生活者への転進をはかった。本来、「文學ハ糊口の爲になすべき物ならず おもひの馳するまゝこの趣くまゝにこそ筆は取らぬ」（同）との思いにいったん封印をして……。だが、一家の不慣れな商いとこの苦闘はわずか八か月余りで破綻、吉原遊郭をのぞむ下谷区竜泉寺町を去ることになった。明治二十七年四月、「塵中につ記」には「いよいよ轉居の事定まる 家ハ本郷の丸山福山町とて阿部邸の山にそひてさゝやかなる池の上にたてたるが有りけり（中略）家賃ハ月三圓也 たかけれどもこゝとさだむ」とある。五月一日の追加記事には「小雨成しかど轉宅 手傳は伊三郎を呼ぶ」とあり、翌五月二日には「小石川師君を訪ふ 轉居のことかたる 歸路西村

にも報ず いづれもそのすみやかなるに驚かる」と記した。ひとたび決心するや一葉の行動は迅速で、引越し費用の調達や転居先の決定はもちろん、雨天もいとわず転居を強行した。この本郷丸山福山町の借家が彼女の終つひの棲み家となり、そこでの第一作が『やみ夜』（初出の表題は『暗夜』目次は『闇夜』）であることはよく知られている。

『やみ夜』（文學界）明27・7、9、11）は、多くの先行研究が一葉における本格的な近代作家の誕生を告げる〈転機〉となつた作と見ている。筆者も同感だが、その〈転機〉が具体的に作品のどのような表象を指すのか、また、その〈転機〉がいかなる事由によるものかは必ずしも明確でない。本稿ではその辺りを中心に考察してみたい。

### I 一葉文學の転機

前田愛は「一葉の転機」と題する論考で『やみ夜』の「意味す

るもの」を周到に論じている。前田氏によれば『やみ夜』以前の「小説作法」は「日常世界の鬱屈した想い」を「ロマネスクな」物語世界に「昇華させること」であり、一方の「日記」は他人に秘すべき「屈辱と憂悶をひそかに記しとどめておく灰色のノート」だったとした上で、「転機」の経緯を次のように述べている。

日記の素面と物語の仮面と、この二つの顔を使い分ける危うい均衡は、一葉がその下向意識を尖锐化させ、主体的に捉えかえて行く過程で破綻を来さざるをえない。(中略)「蓬生」をパロディ化した『暗夜』は、光源氏の救済を待ちわびる未摘花に自らを擬した『かれ尾花』の否定形として書かれる必然性があった。「日陰もの」の苦い冷笑をたたえている『暗夜』のお蘭は、シンデレラの幻想が引き裂かれた後に残された一葉の自画像にはかならない。

ロマネスクな物語世界との〈歌の別れ〉をこのように分析した前田氏は、さらに一葉が「明治国家の陽のあたる場所にぬくぬくとおさまっているかれら(秋の舎に集まる貴顕の子女)の虚飾と偽善への反撥と苛立ちから」やがて「虚無のうきよに、好死処<sup>よきとこ</sup>あれば事たれり」(「日記」明26・7・25)との「破滅意識」を募らせ、そうした「破滅意識にとらわれていた明治二十七年の一葉の心象風景そのもの」が「陰曆五月廿八日の深い闇に包まれた『暗

夜』の池」だったとする。しかし、「日記」の文言を顔面通り深刻な「破滅意識」とみることは多少疑問が残る。秋の舎における「虚飾と偽善」への「反撥と苛立ち」が一葉の心に根深い憤懣を固着させたのは確かだが、「虚無のうきよ」とは世間に対するシニカルな眼を増幅させた〈壮語〉であり、「好死処あれば事たれり」の文言も〈士族意識〉を誇らんとやや虚勢を張った(見栄)の気味がある。とすれば、前田氏のいわゆる「破滅意識」も少し割り引く必要があるだろう。

問題はそれだけではない。先の「日記」は『やみ夜』(明27・7・30、同9・30、同11・30)の一年前(明26・7・25)の記述であり、両者の間には『琴の音』(「文學界」明26・12・30)や『花ごもり』(「文學界」明27・3・28、同4・30)が発表されている。前田論はこの二編を黙過するが、両作は虚無的な「破滅意識」には程遠い作品で、従来のロマネスクな作風の延長線上にある。

たとえば『琴の音』は、幼少期に母と生き別れた渡辺金吾少年(十四歳)が、甲斐性のない父と暮らすもののやがて死別、以後、周囲の庇護もない孤児は心ならずも盗みを働いていたが、森江しづの奏する妙なる琴の音に心を洗われて改心する、という物語である。

俗事にはいっさい無縁で屋敷に閉じこもり、ひたすら琴を弾く森江しづの存在は、王朝文学世界に生きる嫋嫋たる女性像の延長

であり、琴の音に感じて改心するという趣向も近代小説からはるかに遠い。本作に新たな意味を見ようとする論もあるが、題名自体が『源氏物語』『須磨』の段に見える「琴の音にひきとめらるゝ綱手縄たゆたふ心君知るらめや」に因むとされるように、王朝文学のロマネスクな香りがきわめて濃厚な作品である。ここに虚無的な「破滅意識」を読み取るのはきわめて困難だろう。

続く『花ごもり』も同様である。山の手の法律学校を卒業し、同校の出版部に勤める瀬川与之助（二四歳）は、母お近（五十歳過ぎ）と、両親のいない父方の従妹お新（十八歳）の三人暮らしである。与之助はいずれお新と所帯をもつと思ひ定め、お新もそれを疑わない。だが、旧知のお辰が仲介する某省次官・田原氏の令嬢お広との縁談話が始まると、お近は瀬川家の将来を考え、お新のことは割り切り、田原家との縁談を勧める。与之助は「内縁にすが」る「立身」を気にして煮え切らないが、お広の「はつきりとせし気象」にもひかれ、お新を気づかいつつも了解の返事をする。お近から他家への奉公を勧められたお新は、旧大名の家ではなく、田舎に隠棲する画家夫婦の家を選ぶ。なぜと問われたお新は、与之助も好きな「画」を自分も「学」んで「恋しき時にお姿をかきても慰められます事故」と答え、「不憫」な「かなしき恋のおもかげ」を浮かべる。

法律学校、高官の娘との縁談、姻戚による立身出世、情実よりも現実的な結婚を選択する功利主義など、作品は相応の近代的意

匠をまもっている。しかし、母お近の本心は単純な打算であり、与之助の迷いも単に意志薄弱な男の見栄にすぎず、一編の眼目もお新の哀れな心情を焦点化する。だが、お新には自立した近代的な女性意識などは皆無で、「かなしき恋のおもかげ」をひきずる古風で「不憫」な女でしかない。物語の表層を彩る近代的意匠とは裏腹に、内実は王朝文学の「ロマネスク」な世界を一步も出るものではない。繰り返せば、ここにも虚無的な「破滅意識」を読み取るのは困難である。

つまり、前田氏の参照する「日記」以後の二編には虚無的な「破滅意識」など皆無で、依然としてロマネスクな小説世界が継続している。従って、一葉文学の〈転機〉は、『花ごもり』発表後の明治二十七年五月以降から『やみ夜』起稿に至る、約二カ月の短期間に突然生じたドラマだといえる。ロマネスクな物語世界に別れを告げ、一葉が近代作家に変貌するには、その認識を一変させる突発的な事態を想定する必要がある。『やみ夜』の〈転機〉は、そうした状況を勘案しながら改めて再考されるべきだろう。

## II 樋口幸作の病と和田説

『やみ夜』の「転機」を再考するには執筆過程から見直すべきだが、すでに関良一に詳細な検証がある。関氏は、「文學界」第十九号（明27・7・30）の第一回発表分（一〜四）について、平

田芥木の来信等を手掛かりに次のように述べている。

七月十七日以前に（中略）若干枚が成稿されて『文学界』あてに送られていたが、なお短いので書き足すように求められ、その『約束』の下に続けたのが七月二十二日発送の続稿であり、両者併せて四回分が七月号に初出されたのであろう。さすれば『やみ夜』起稿は遡って六月頃と考えてよいかもしれない。

関氏は続けて、同じく「文学界」同人たちの来信を参照しながら、「文学界」第二十一号（明27・9・30）発表の二回目（五〇六）や「文学界」第二十三号（明27・11・30）発表の三回目（七〇十二）の執筆状況を検討し、『やみ夜』全篇の脱稿は二十七年十一月二十二日頃であった」とする。関説は、従来の諸説を訂しておおむね正しいと思われ、二回目以後の見解には全く異存がない。ただし、執筆動機と関わる冒頭部の「起稿」時期を「六月頃」とする推測にはさしたる根拠がなく、「若干枚」の「成稿」ならばさほど日数を要しないし、あえて十七日間以上も前の「六月頃」に遡るいわれもない。加えて、『やみ夜』が従来のロマネスクな世界から急に「転機」を迎えたことからすると、前述のごとく一葉の認識を揺るがす突発的な事態が起きた可能性も少なくない。とすれば、特に波乱も見えない「六月頃」の起稿とするよ

り、後述のごとく七月初頭以降の起稿と見る方が自然ではあるまいか。

七月初頭（明27）、樋口家には予期せぬ波乱が起きた。かつてその事態をめぐって大きな論争が交わされた。デリケートな要素もあるので、煩雑ではあるが論争の経緯を再確認しておこう。まず和田芳恵は明治二十七年七月一日に死亡した一葉の従兄弟・樋口幸作の病が（癩病）ではなかったかと推測し、波紋を拡げた。ことの発端は以下に見える日記の記事である。

十時頃成けん、桜木丁より使來り、幸作死去の報あり。母君驚愕、直に參らる。からはその日寺に送りて日ぐらしの烟とたちのぼらせぬ。浅ましき終を、ちかき人にみる。我身の宿世もそごろにかなし（「水の上日記」明27・7・1）

同日の日記前半には蘆澤芳太郎の訪問や横須賀から来訪した「野々宮君」との「さまざまなる物語」が記されている。日曜早朝からの来訪は考えにくいので、午後、来客たちとの面談を終え、夕食後に一息ついたのちの夜「十時頃」、丸茂病院（旧桜木病院）から「幸作死去の報」が入り、「驚愕」した母があわてて病院に急行した。問題は、幸作の遺体が「その日」の深夜に「寺に送」られ、「日ぐらし」こと日暮里の火葬場ですぐに荼毘に付されたという異常な慌ただしさにある。翌日、「早朝母君および

おくらと共に日くらしに骨ひろひにゆく」「水の上日記」明治27・7・2とあるので、幸作は通夜も葬儀もなく火葬されたことが確認できる。この事態に直面して一葉は「浅ましき終を、ちかき人にみる。我身の宿命もそごろにかなし」と深い嘆息をもらした。

和田氏は、この事態に関連して、一葉と母に宛てた幸作の書簡（明治27・1・25）に見える「小生の疾病」という記述に注目し、次のように述べた。

昭和十八年一月刊行の「一葉に与へた手紙」の編集に当たるとき、この樋口幸作の手紙にある「疾病」は、どういふことを指しているか、考えようとしなかった。／（中略）幸作が業病であった暗示を最初に私に与えてくれたのは、益田勝俊である。／私は中萩原を中心に、その周辺を資料調査のために歩き廻った。／私が訪ねた古い人達のあいだに、幸作が業病に犯されていたことが、春先きの氷のように薄く残っていた。（中略）／「幸作一家は山梨、一葉一家は東京」そういう隔たった生活をしていても、血縁であったから、幸作の病気は、一葉一家にとって重大な問題になった。癩病は遺伝ではなく、伝染病であることは、近代医学で決定されているが、しかし、長いあいだ、遺伝性と言われてきたために、理屈ではわかっていても、感情的には、すっきりした観念になっていないようだ。

一葉の言う幸作の「浅ましき終」とは、不幸な人生へのありがちな嘆きをさすとは思えない。和田氏は、郷土史家・益田勝俊の暗示や穴澤清次郎への聞き取りや故郷周辺の噂などを手掛かりに、幸作が「業病」とされた「癩病」を患っていたのではないかと推測した。もしそれが事実なら、その病を（遺伝性）と見る当時の風潮からして血族全体が社会的差別をうけるのは不可避である。

たとえば、明治開化期に世間を騒がせた「毒婦」高橋お伝を素材とした二編の実録物がある。仮名垣魯文『高橋阿伝夜叉譚』（明12）と、競作となった岡本起泉『其名も高橋毒婦の小伝・東京奇聞』（明12）である。両作はともにお伝の夫・高橋波之助をハンセン病だとし、その病を血統による遺伝病として差別的状況を描いているが、後者に次のような一節が見える。

血統にのこる癩病は彼一身にとゞまらず孫子の代まで人々に忌み嫌はるゝ事になりてハ先祖へ濟ぬだけでなく現在親族も出入をきらひ世の交ハリが出来ぬに至る。

「孫子の代まで人々に忌嫌ハ」れ「世の交ハリが出来ぬ」この「業病」から予測される事態は、金銭的困窮など問題にならないはるかに深刻な状況で、それこそ（やみ夜）の奈落に突き落とされるような衝撃だったに違いない。和田氏は一葉が本郷丸山町へ

転居後、『大つごもり』以下の「すぐれた作品を発表したことは、  
幸作の死をのぞいては、解決できないと考えるようになった」とも述べている。

### Ⅲ 和田説への反論

和田説には、早く塩田良平が多角的な検討を通じて否定的見解を述べた。塩田論の要点を簡条書きにまとめると①「一葉の日記が美文であること」から「この『浅ましき終云々』を直ちに病状と結びつけることは危険」で、『浅まし』なども、一葉の好きな形容詞で「慣用句を用ひてゐる」と考えられる。②「二十四時間おらずに、そのまま寺に送つたとあるから、常識的には傳染病にもとれるが、それが何病であるかは、現存の資料を以てしては遂に窺ひ得ない」ので「幸作が癩であつたか、或いは癩と見誤られたかを確實に決定することは今のところ不可能である」。③「樋口一族が幸作を癩病であるとは夢にも意識しなかつた、といふことは心理的にも證明でき」とし、露伴の「對髑髏」を読んでいた一葉の読後感に特段の反応が見えないこと、また「當時の習慣として癩患者及び一族がそれを意識したとき」「當然故郷につつ抜けになるやうな同郷人の病院を訪れるはずはない」と、さらに郷里の田中爲重（幸作の妹くらの義兄）の書簡の文面にも変化はない。④「もし、一葉が親近者の癩を知ることによつて、心理的にも作品精神にも影響が起こつたとすれば、恐らく

『たけくらべ』の如き抒情精神は消滅し、もつと生死をつきつめる思想性の強いものになつた」はずだが一葉の後期作品には「生死の不安については一言も洩らされてはゐない」——となる。以上から、塩田氏は「幸作癩死亡の衝撃による一葉文學深化説は物語적ではあるけれど、現在の資料では、その真偽をたしかめることはできない」と否定的結論に至つた。

一方、野口碩も和田芳恵著『一葉の日記』の「補注」で、「幸作の死因であるが、少なくとも癩病のためではない。ハンセン氏病は容易に命を奪う病気ではないからである」と和田説を否定した。ただし、問題の核心は「死因」ではない。さらに野口氏は『樋口一葉事典』の「樋口幸作」でも次のように述べている。

この幸作の「疾病」をめぐって和田芳恵はハンセン氏病説を出して論議を呼んだが、これを裏付けるいかなる根拠もない。また、一葉や多喜、大藤村の樋口家関係者がハンセン氏病の遺伝を懸念した形跡に至つては資料から全く見出すことができない。ただ、一部の証言者の口からハンセン氏病をおわす幸作のあだ名が出たことから、不幸な論議に発展した。丸茂（文良）は（中略）〔明治〕二十六年に下谷桜木町三十三番地の小田耕作の経営した頑癬治療専門の病院を買取つて外科皮膚科併設の分院とした。従つて、丸茂は外科医であり、この分院は皮膚科の治療で有名ではあったが、ハンセン氏病治

療院ではなく、くらが相談したのは、(中略) 幸作が人目に恥  
じない生活に戻ることが願ったの頑癖又はそれに近い皮膚病  
の治療、もしくは整形治療であったと考えられる。(中略) 死  
因が病死でなかった可能性もある。その日の内に遺骸が日暮里  
村東京博善社の火葬場に送られたのも、伝染病のためとは限  
らない。「水の上日記」は「浅ましき終をちかき人にみるわが  
身の宿世もそごろにかなし」と記しているが、この言葉は「水  
の上日記」(明治二十八年十月起稿)の冒頭に書かれた「野  
末にみかへるものなかるべき運命」と同じ意識から出ている  
と考えられ、「宿世」が遺伝を指すとは思われない。

野口氏のやや感情的な反論は、和田氏が根拠のない風説に拠って  
一葉の尊厳をいたずらに傷つけるものだと言わぬばかりで、和田  
説には「いかなる根拠もない」と強く否定する。だが、野口氏の  
「頑癖」「皮膚病」「整形治療」説や「死因が病死でなかった」と  
の推測も入院先の専門からの類推であって具体的な「根拠」はな  
い。当時、世上では「癩病」を遺伝性の業病とみるのが一般的  
で、病いに関する医学的知識も衆知されておらず、専門的な「ハ  
ンセン氏病治療院」もきわめて少なかった。そうした状況のも  
と、仮に幸作の身にハンセン病に類する症状(皮膚の異常など)  
が出ていたとすれば、苦境の中、同郷の誼みで丸茂医師にすが  
り、「皮膚科の治療で有名な」分院を訪れたとしても不思議では

ない。だが、塩田氏や野口氏の反論もあり、複雑な差別問題の歴  
史も絡むためか、近年では一葉研究者たちも〈幸作癩病説〉を話  
題にすら上げなくなった。

#### IV 『ひとひらの舟』が遺した課題

そうした中、〈幸作癩病説〉に光を当てたのは三枝和子の小説  
『ひとひらの舟 樋口一葉の生涯』である。三枝氏は、一葉の久佐  
賀義孝とのきわどい借金交渉が幸作の発病・入院に要する金策に  
関係するとし、幸作の病と死が一葉に与えた「甚大な衝撃」を次  
のように描いた。

幸作の病氣と死は、一葉の心に甚大な衝撃をもたらした。こ  
ればかりは歌子師にも桃水にも、まして秋の舎の友達などに  
は決して明かすことのできぬ問題であった。一葉は一人で悩  
んだ。悩みながら、何とか活路をひらこうとしていた。／だ  
が、この活路が悲惨で奇妙なものであることは、一葉が何よ  
りもよく知っていた。自分は、と言うよりも自分たち一家は、  
世間から拒まれ、疎外される存在である。そうした世の除け  
者のような者たちが、どうして世間に繋がって行くことができ  
るのか、それが一葉の問題であった。／ただ、悲惨な自分  
の立場を逆手にとって、大きな転機が一葉を訪れつつあるこ  
とも事実だった。

問題の核心はこの描写にほぼ尽きている。だが、三枝氏は「私が書いたのは評伝小説であって文芸評論ではない」ので、その「事実」を「作品を素材に検証するという方法をとらなかつた」と述べ<sup>(注18)</sup>る。これは三枝氏が「一葉研究者たちにあえて遺した課題であり、一葉のうけた「甚大な衝撃」の内実を「作品を素材に検証する」作業への要請だと思われる。

ともあれ、遺体を深夜のうちに運び出し、法的にも特例とされる当夜に火葬するという措置<sup>(注19)</sup>は、それだけで尋常ならざる事態である。こうした幸作の死の〈隠匿〉は、その病が血縁に累を及ぼす〈遺伝性〉の「病」で、それが表沙汰になれば一族に社会的差別という絶望的な災厄が降りかかると見なしたための措置にはかならない。幸作の病が実際にはハンセン病ではなかつたにしても、それを連想させる「浅き終」を「ちかき人」にリアルに見たからこそ、一葉は「我身の宿命もそごろにかなし」との嘆息を洩らしたに相違ない。この沈痛な吐露はいわゆる「美文」や「一葉の好きな形容詞」や「慣用句」といった修辭的レベルの言葉などではない。第一、この異例の事態や一葉の沈痛な反応を不問にして直近の作品を読むなどかえって不自然だろう。幸作の死と隣接した『やみ夜』の〈転機〉にもその衝撃が影響した可能性はきわめて高い。和田説の論拠がいづれも間接的な材料で客観的実証性に乏しいのは事実だが、この病を取り巻く当時の社会状況から

いえば、近親者が口を噤み、明白な「形跡」が残りにくいのはむしろ当然である。それゆえ、客観的な「根拠がない」ことがただちに和田説の無効を証するわけではない。ただ、和田説に弱点があるとするれば、一葉作品そのものの中に幸作の死と関わる具体的な痕跡を指摘できていないこと、すなわち三枝氏の言う「作品を素材に検証する」作業が十分ではなかつた点である。だが、もし「検証」の結果、『やみ夜』にその痕跡が見いだせるとしたら、問題は全く別の様相を呈するだろう。

## V 陰曆の五月廿八日

『やみ夜』の物語は、月明かりもなく「暮れてほどなければも闇の色ふか」(一)い宵の口に始まる。廃屋にも似た松川邸の玄関先で、人力車に撥ねられ、衰弱の激しい青年を用人の佐助が玄関内にかつぎ入れ、松川家のお嬢様・お蘭に許しを請う、というのが発端である。ところで、この物語の発端当日を、一葉は「陰曆の五月廿八日」(一)と明記している。この日付については、和田氏をはじめ、前田氏も菅聡子も説明や注を加えていない。管見の及ぶところ、この日付を問題とし、具体的な検討を加えた先例を知らない。

この「陰曆五月廿八日」を別とすれば、作中の時間表象はおおむね漠然としている。かつぎ込まれた青年・高木直次郎の過去がやや詳しく語られ(三)、「一週」間ほど経って人心地のついた

彼の問いかけに佐助が「一年三百六十五日客の来る事なく」(四)と新暦(太陽暦)の日数を語る以外、大まかな時節の推移が示されるにすぎない。「此夏もくれて、秋は萩の葉に風そよぐ頃も過ぎぬ」(八)「秋は夕ぐれ夕日花やかにさして」(九)「ほどを隔て、冬のはじめつ方」(十二)といった四季の移ろいや、「此事ありて三月ばかりの後、門は立派に敷石のこわれも直りて」や「汽車は國中に通ずる頃なれば」(十二)などの表現である。こうした大まかな時節の移ろいが語られる中で、ただ一カ所明示された「陰暦の五月廿八日」はひときわ目立つ記述といつてよい。

一葉はなぜ物語の発端にあたる日付を特定・明示したのか。試みに「陰暦の五月廿八日」を当年明治二十七年(一八九四)の新暦(太陽暦)に換算してみよう。すると、「陰暦の五月廿八日」は新暦の明治二十七年「七月一日」に該当する。これはいうまでもなく一葉に深刻な打撃を与えた樋口幸作の命日、病没の当日なのである。

『やみ夜』の物語内容からみて「陰暦の五月廿八日」に特別な意味は見当たらない。とすれば、それは作者一葉がある感慨のもとにひそかな〈思い〉をこめて刻印した日付と見てよからう。しかし、新暦の「七月一日」と書いたのでは直近の幸作の死が連想されやすく、その死に様ないし病が他に漏れる恐れもある。そのため慎重に「陰暦」にカムフラージュしたのだと考えられる。それでも〈その日〉をあえて刻印したのは「浅ましき終」を遂げた

従兄弟に捧げた一葉の深い手向けの心情であり、衝撃の深さを物語る痕跡であつたらう。同時に、物語の発端とされたその日付は『やみ夜』の執筆動機が発動した日であり、その起稿も「陰暦の五月廿八日」すなわち新暦「七月一日」以降からほど遠からぬ日々であつたと考えてよからう。第一回発表分(七月十七日送稿)の前の「若干枚」の「成稿」とは、その衝撃に思いを乱しながらも慌ただしく綴られた部分ではなかつたらうか。

今となつては幸作の病が実際にハンセン病であつたか否かは確定できないし、その病名自体が重要なでもない。とはいへ、遺体への異例の処置は、そのように処置すべき疾病との診断をうけて認可された「特例」だったことは確実で、一葉一家も自分たちに「近き」血族が社会的差別をうける「疾病」だと思えばこそ〈隠匿〉を優先したのであろう。この事態は金銭の不遇をかこつて従来の一葉の現実認識をはるかに超えるものだった。

金銭的困窮であれば何らかの自助努力によって難局を脱することも可能だろう。現に一葉は厳しい家計状況を何とかやりくりしてきた。しかし、社会的差別となると、巨大かつ茫洋とした社会が相手だけに具体的な活路を見いだすのは困難である。幸作の病と死は、一葉の現実認識に新たに差別という〈社会性〉を付与することになった。しかもそれは、彼女自身が差別される側、余儀なくして社会から疎外される弱者の立場を実感させるものだったわけで、彼女の視線は否応なく広汎な〈社会〉へと向かうこ

とになる。ロマネスクな物語世界は一転、リアルな〈社会〉とその理不尽な構造を彼女の眼前に迫らせるものとなったのである。

一葉作品の〈社会性〉については、『やみ夜』の評価史に一石を投じた関良一<sup>(1)</sup>の言及が注目される。関氏は、明治二十七年四月二十六日から五月二日に至る日記の、よく知られた一連の記事——「かひなき女子の何事を思ひ立たりとも及ぶまじきをしれど、われは一日の安きをむさぼりて百世の憂を念とせざるものならず」や「わがこゝろざしは国家の大本にあり」など——を踏まえて次のように述べる。

お蘭の冷情、兩人に通ずる衆俗への憎悪と復讐の念、直次郎の行爲に見られる捨身、そうしたものを通して吾々は一葉の社会への痛烈な抗議を読まねばならない。「やみ夜」は政治社会の頹廢に取材した本格的な社会小説であり、前節に述べたごとき経世慷慨の念と、「要する処は好死処の得まほしきぞかし」(明27・2・23)／「わがかばねは野外にすてられて、やせ犬のゑじきに成らんを期す」(明27・4・26)のごとき悲痛・激越の情より発した、かの「国の大本」の壮語の文学的实践であった。

『やみ夜』を「本格的な社会小説」と見る意欲的な論だが、やや疑問も残る。関氏の引く日記の文言は、『花ごもり』(『文学界』

明27・3・4)の前後を取り巻く言説である。一葉の「経世家」ふうの「壮語」が、関氏の述べるように「文学的实践」に直結するのだとしたら、『花ごもり』にその影が全く見えないのはなぜか。そして、次作の『やみ夜』が突然「社会小説」に変貌したのはなぜか。関氏の見解は必ずしも十分ではない。

天下国家を論じる日記中の「壮語」がそのまま文学作品に落とし込めるなら、文学の問題は随分単純になるし、文学作品を読む作業も各段に容易になるう。しかし、「壮語」のような〈大文字〉は決してそのまま文学作品に落とし込めるわけではない。文学に表象される〈社会〉とは、〈大文字〉の「壮語」が語る「社会」の写し絵ではなく、作者の体験や感情や観念に深く媒介されながら複雑な言語作用で濾過・昇華され、その上で再構成される構築物としての「社会」である。つまり、信条を直截に吐露する「経世家」ふうの「壮語」は政治的言語であって、「小説」のパン種となる文学的言語ではない。それよりも幸作の「浅ましき終」を肌身で感じた〈痛覚〉から紡ぎ出される言語、自身が差別される側の弱者の立場を実感する中で別の相貌を見せ始めた〈世間〉を基盤として再構成される人間模様、それこそが一葉の〈社会小説〉への第一歩だったように思われる。

## VI 〈転機〉を示す表象

『やみ夜』の〈転機〉を示す端的な表象は、従来の一葉作品に

は決して見られぬ〈悪女〉の造形、それも〈復讐心〉を抱く女性である。前述のごとく『琴の音』や『花ごもり』の女性は王朝文学のロマネスクな世界にありがちな嫋嫋たる女性であった。この二作のみならず、それ以前の『闇桜』から『雪の日』に至る八編に登場する女性たちも、他人を恨むことのない善良で寂しげな美人であり、お蘭のように「夜叉」の心を抱く女性は一人もいない。以下、その八編に登場する女性像を簡単に確認しておこう。

『闇桜』（「武蔵野」明25・3）……十六歳の女学生・千代は、隣家の幼なじみである大学生・良之助と二人連れのところを学友たちから囃したてられ、彼への恋情に目覚めるが、それを意識するあまり懊悩が深まり、病み衰えて亡くなる。

『たま櫛』（「武蔵野」明25・4）……旗本三千石の家に生まれた十九歳の青柳糸子は、維新後の一人暮らしの面倒を見てくれた牧野雪三と竹村子爵の次男・緑と、二人の男性から想いを寄せられるが、それは自身の節操の無さが原因だと考え、「憂き世の厭はしさ」から自殺を決意する。

『別れ霜』（「改進黨新聞」明25・4・18）……以後15回連載）……強欲な父親のせいで相思相愛の仲を裂かれた呉服商の一人娘・お高と本家の一人息子・芳之助の二人は、心中をはかったものの、男だけが死に、残されたお高はひそかに彼の両親の面倒をみていたが、監視の目を盗んでひとり死出のたびに出る。

『五月雨』（「武蔵野」明25・7）……女中たちが「光氏」と噂

する杉原三郎に恋心を抱く十九歳の梨本優子と、優子の恋情を知りつつもひそかに三郎を想うお八重と、二人からの想いに悩んだ三郎は姿を隠し、いつしか出家していた。

『経つくえ』（「甲陽新報」明25・10）……わがままに育った十六歳の香月園は、医科大学の助手で一心に自分の面倒を見てくれた松島忠雄から急に遠い札幌に去ると告げられ、その親切がにわか心に沁み、以後身をつつしむようになったが、その秋、松島が死んだと聞いてからは経机に烟を絶やすことはなかった。

『うもれ木』（「都の花」明25・11・12）……十七歳のお蝶は、売れない薩摩焼の絵師である兄・入江籟三と二人で暮らしていたが、兄の後援者を装って詐欺を計画する篠原辰雄に恋をし、辰雄の志のために有力者の貢ぎ物になるか、操を立てて独り死ぬか、思い悩んだすえに死を決意して家を出る。

『暁月夜』（「都の花」明26・2）……香山家の令嬢として何不自由なく育ったと見える一重だが、彼女に恋する森野敏に対し、実は身分違いの悲恋に果てた両親の間に生まれたと告白し、それゆえ波風の立たぬ孤独な人生を願うのだと告げる。

『雪の日』（「文学界」明26・3）……自分を慈しんでくれた伯母の反対を押しきり、年齢の離れた小学校教師・桂木のもとへ出奔した薄井珠は、現在は桂木の妻として東京に住んでいるが、夫も今はつれなくなり、彼女は雪の振る景色を眺めつつ、はかなく死んだと伝わる伯母を想い、すべてが誤りだったと悔恨にうち沈

む。

見ての通り、『やみ夜』以前の十編に登場する女性は、ロマネスクな世界にふさわしくはかなげで心優しい女たちである。お蘭のような「女夜叉」、復讐心に燃えて恨みを晴らすべく殺意を抱くような人物はいない。お蘭は「冷やかなる眼中に笑みを浮かべ」(六)「悪ならば悪にてもよし」と「女夜叉の本性」(七)を露にして直次郎をたぶらかし、「今日の今こそ其方は誠に可愛き人に成りぬ。(中略)今日より蘭が心の良人に成りて、蘭をば君が妻と呼ばせ給へ」(十一)との甘言を弄して浪崎暗殺を唆す。『やみ夜』において一葉の描く女性像は一変し、それが何よりも一葉文学の〈転機〉を明示している。

もう一点、『やみ夜』の〈転機〉を示す表象は、社会の暗部を体現する男性像の造形である。浪崎漂は「国会議員」という地位を利用し、お蘭の父のように「あはれ」な「先供」を「手先に使」い、その犠牲の上で不正に財をなし、「立派な方様」の仮面を被って私腹を肥やす確信的な偽善者である。こうした男性像は『やみ夜』以前の作品には登場しない。強いてあげれば『うもれ木』(明25・11〜12)の篠原辰雄が近似した男性であるが、その内実は大きく異なっている。

旧名新次であった辰雄は、かつてお蝶の兄の不肖の弟弟子だったが、出奔後、地方の金満家の入り婿となって財を得、篠原辰雄の名で広大な屋敷を構え、「立派な紳士」を装っている。彼は

「愛世済民」を掲げ「細民困窮のあり様、見るに腸たえずやある」人物として評判を得るが、それは世間を欺く演出だった。一方お蝶に心を配り、兄の仕事を手援すると見せながら、その実、大掛かりな詐欺を計画し、お蝶を有力者の貢ぎ物にと考えている。篠原は詐欺師の悪漢だが、彼には浪崎のような「口に正義」を唱える「国会議員」といった国家を笠にきる社会的地位、つまり〈公の隠蓑〉に保護されていない。もしコトが露見すれば即座に罪に問われ、その身は破滅する。篠原の啓蒙家たる仮面は〈個〉の力による偽装であって、自身の手を汚さぬ偽善者の仮面ではない。彼はむしろ社会の外にあるアウトローであり、社会の理不尽な構造に胡坐をかいて甘い汁を吸う連中とは異なる。

復讐を企てるお蘭も、その相手である浪崎も、二人はともに『やみ夜』以前には登場しなかった人物像である。前者は社会的権力の犠牲者の娘として「女夜叉」となり、後者は社会の上層にある地位を利用して特権を謳歌する。二人は表面化しにくい理不尽な社会構造の〈裏面〉を勝者・敗者の両側から照らし出す存在であり、一葉の〈社会〉に対する新たなまなざしを象徴する新たな人物である。『やみ夜』はこうした表象を描出することで一葉文学の〈転機〉を示す作品となった。

## Ⅶ 復讐劇の失敗と末尾の風景

お蘭の「女夜叉」の心は、自分や父を裏切った浪崎漂への復讐

心から生じたものである。だが、そのために企てられた暗殺計画はあっけなく失敗に終わる。その失敗について同時代の「迂鉛」生は「智恵浅きは女の常と云ふことを証拠立つる」<sup>(註25)</sup>ものと作品の未熟さをあげつらうように批判する。しかし、この失敗は作者一葉の構想にあらかじめ織り込み済みの末路だったと思われる。現に作品を読みすすめても、復讐の成功は初めからおぼつかなく、暗殺の成功後を想わせる明るい兆しも皆無である。<sup>(註26)</sup>他方、終幕で明らかとなる松川邸の様変わりやお蘭たちの失踪はむしろ自然な結末と感じられる。つまり、お蘭による浪崎暗殺計画の失敗は、特別な手段も後ろ盾もない女性がただ一人「社会」の巨悪や矛盾に牙を剥いても敗北しかないとを、お蘭のみならず一葉も先刻承知していたことを物語る。この勝利なき復讐劇の主人公は、どこか時代錯誤の女ドン・キホーテを思わせる。

では、お蘭はなぜこの無謀な復讐劇に突き進んだのか。それは近代化の進む新たな時代の中で、廢屋に等しい松川邸がもはや崩壊を免れがたいように、お蘭自身もまた社会の表舞台から退場すべき過去の人間であることを自認していたからである。換言すれば、お蘭の暗殺計画の失敗は彼女自身の存在をみずから抹殺するための予期された手段でもあった。お蘭は松川邸と運命を同じくすべくその崩壊に殉じたのである。

お蘭の暗殺計画は、浪崎を典型とする「社会」の闇に対する〈個〉のはかない抵抗であったが、それは一葉にとっても他人事

でなかった。幸作の「浅ましき終」に発する社会的差別も〈個〉の力では抗しがたい厚い壁であるが、それでもその悲運に押し潰されまいと苦闘する一葉の執念が不穏な〈復讐〉劇の形をとらせたとように思われる。しかし、社会や時代は〈個〉の抵抗など全く無かったかのように無表情で流れてゆく。『やみ夜』の終幕は、暗殺に失敗した直次郎の失踪を告げたのち、次のように結ばれる。

夫れより怪しきは松川屋敷の末なり。此事ありて三月ばかりの後、門は立派に敷石のこわれも直りて、日毎に植木や大工の出入りしげきは主の替りしなるべし。されば佐助夫婦、お蘭も何處に行きたる。世間は廣し、汽車は國中に通ずる頃なれば。

語り手は直次郎の行方よりも「怪しき」は松川屋敷の行く末だとして、新たな「主」に替った屋敷の変貌に注目する。他方、直次郎にかぎらず、お蘭や佐助夫婦の行方も不明だが、語り手は彼らの行く先を問おうとしない。これは個々の人間の運命を無表情に呑み込み、急速に変貌してゆく近代都市風景の一端を示すものだろう。そのまなざしは「世間は廣し」という生活空間の拡大とそれに拍車をかける「汽車は國中に通ずる頃」すなわち交通網の整備・拡大という典型的な〈近代化〉を象徴するスキームをもっぱら前景化し、それと反比例してお蘭たち個々の人間の恨みや記憶

を後景に押しやってゆく。つまり、〈社会〉の近代化とは、個人の尊厳や弱者の存在を〈闇の中〉に没し去ってゆく非人間的な構造の浸透を意味する。幸作の病によって差別される側としての社会的弱者を自覚したことに端を発し、「陰暦の五月廿八日」に始まった『やみ夜』の復讐劇はあえなく幕を降ろした。しかし、その火種はまもなく「女なりける」だけで〈社会〉から抑圧を強いられるさまざまな女性たちの苦悩を掘り起こすダイナモへと化してゆくのである。

注

- (注1) 北田幸恵「越境する女・お蘭——『やみ夜』論」(『樋口一葉を讀みなおす』平6・6、學藝書林)や森山重雄「一葉の『やみ夜』と相馬事件」(『日本文学』昭46・4)や後掲前田愛の論(注2参照)など。
- (注2) 前田愛「一葉の転機——『暗夜』の意味するもの」(『樋口一葉の世界』(平凡社選書82 昭53・12)
- (注3) 和田芳恵「補注七五」『日本近代文学大系8 樋口一葉』(昭45・9、角川書店)
- (注4) 関良一「一葉小説成立考」(『樋口一葉考証と試論』(有精堂出版 昭45・10)
- (注5) 樋口悦編「一葉に與へた手紙」(今日の問題社 昭18・1)
- (注6) 和田芳恵「樋口一葉伝」(新潮文庫 昭35・6)
- (注7) 上記樋口幸作書簡中に「愚妹ノ将来ニ付テハ小生モ配慮致居候

外ナラス只小生ノ疾病アル故」云々の言及がある。

- (注8) (注6) に同じ(二二八頁〜二二九頁)
- (注9) (注5) に同じ。
- (注10) この辺については主に「歴史のなかの癩者」(ゆみる出版 平8・4)の「第三章 隔絶のなかのハンセン病患者」を参照。本書には日本近代におけるハンセン病に関する用例が多く引かれている。ほかに廣川和花「近代日本のハンセン病問題と地域社会」(大阪大学出版会 平23・2)、「ハンセン病講義——学生に語りかけるハンセン病」(熊本学園大学付属社会福祉研究所 現代書館 平25・3)などを参照。
- (注11) 因みに前者の作者仮名垣書魯文は、後藤昌文(後記(注16)参照)の「起癩病院醫事雜誌」の編集に当たり、広報に協力している(『讀賣新聞』明11・1・27)。
- (注12) (注6) に同じ(二二〇頁)。
- (注13) 『樋口一葉研究』(中央公論社 昭31・10) ここは増補改訂版(昭43・11)の第六章第一節「四、樋口幸作」を参照。
- (注14) 和田芳恵「一葉の日記」(『福武文庫 昭61・3』の「補注52」による。なお福武文庫本の元版は「一葉の日記」(筑摩書房 昭31・9)
- (注15) 『樋口幸作』(『樋口一葉事典』(おうふう 平8・11)
- (注16) 近代初めハンセン病治療で大きく貢献した医師・後藤昌文が明治八年に猿楽町で開設した起癩病院が最も有名だが、ほかには博愛社、貧癩院、上野養育院、済生治癒学院の名があるものの、癩病治療の専門病院は少なく、明治二十年十月駒込千駄木町に開設された衆済病院が癩治療の大規模病院として知られた(『讀賣新聞』(明10・3・23、明11・1・29、同2・12、同2・14、同5・

17、明18・2・3、明20・10・27)などの記事による。

(注17) 三枝和子『ひとひらの舟樋口一葉の生涯』(人文書院 平4・6)

(注18) 『月報』『新日本古典文学大系 明治編24 樋口一葉集』(平13・10 岩波書店)。三枝氏はほかにも「幸作の病氣」(『文芸・秋季号』平8・8、河出書房新社)でこの問題に言及している。

(注19) 太政官布達(明17・10・4)「墓地及埋葬取締規則」第三條は二十四時間内の埋葬や火葬を禁じているが、「但シ別段ノ規則アルモノハ此限リニアラス」とあって、伝染病その他の事情で医師が認めた場合は例外としている。

(注20) 『日本近代文学大系』(昭45・9 角川書店) (注3参照)

(注21) (注2) ほか参照。

(注22) 『新日本古典文学大系 明治編24』(注18) 参照。

(注23) 『20世紀曆 曜日・干支・九星・旧曆・六曜』(日外アソシエーツ 平10・11) 参照。

(注24) 関良一「晩年の一葉」『樋口一葉考証と試論』(注2) 参照。

(注25) 『奥羽日日新聞』(明治29・1・8~10)、但し『樋口一葉事典』(注15)の「研究史および研究動向」(北田幸恵)による。

(注26) 関礼子『暗夜』の相互テクスト性再考」(『解釈と鑑賞』平15・5)に波崎刺殺が「あっけないほどの体たらくに終わる」とあり、「悲劇というよりむしろ笑劇に近い展開」との指摘がある。

#### 【付記】

末尾の「汽車は國中に通ずる頃」に関する問題にも言及したかったが、すでに紙数を超えている。あらためて続稿を期したい。

## 『雨月物語』「浅茅が宿」の教材化

——文学史の授業構想、模索の一過程——

安 道 百合子

### はじめに

アクティブラーニングという言い方にあらわれるような学習者主体の学びの形態が重視されるようになり、大学の授業も、講義系科目や専門科目が削減されたり、授業方法を見直される傾向にある。そんななかで本学でも「日本文学史」の授業は「文学史Ⅰ（上代・中古）」「文学史Ⅱ（中世・近世）」「文学史Ⅲ（近代Ⅰ）」と三科目あったものが「文学史Ⅰ（古典）」「文学史Ⅱ（近代Ⅰ）」の二科目に削減された。「Ⅰ」は上代から近世まで。およそ一五〇〇年あまりを駆けぬけるわけである。稿者は「Ⅰ」を新たに担当するにあたって、文学史の授業をどのように構想しようかと考えた。本稿はその模索の過程であり、ひとつの試行の報告でもある。

### 一、授業「マンガワークショップ」との出会い

まずは少しまわり道となるが、構想のきっかけとなった授業について紹介しておきたい。

新たな文学史科目が開講されるほぼ一ヶ月前に、漫画家武富健治氏に集中講義を依頼した。当時の日本文学科は、日本語・日本文学専攻、文芸創作専攻、地域文化専攻の三専攻からなり、文学研究を基盤としつつも創作の学びを一つの大きな特徴としていた。創作の学びでは、毎週開講のゼミ科目などで、村田喜代子氏をはじめ現役に活躍されている作家が指導にあたるが、それ以外に、ゲスト講師に集中講義を依頼しているのである。

さて、二〇一五年度の武富氏の「マンガワークショップ」という授業は、大きく三部から構成されていた。一部はマンガという文芸ジャンルの特徴と史的展開の講義、二部は『雨月物語』「浅茅が宿」のマンガ化の演習、具体的にはネーム作成とその制作物